

## 当院での新人研修の取り組み

◎山本 景子<sup>1)</sup>、三苫 朝<sup>1)</sup>、仲野 友<sup>1)</sup>、布川 千絵<sup>1)</sup>、田村 涼子<sup>1)</sup>、安武 卓哉<sup>1)</sup>  
公益社団法人 福岡医療団 千鳥橋病院<sup>1)</sup>

【はじめに】当院は病床数 350 床の中規模病院で、検査部は検体検査科（病理細胞診、微生物検査を含む）と生理機能検査科の 2 つに分かれている。現在、スタッフは 30 名で日当直業務は 1 人体制で行っている。日当直業務は検体検査、輸血、PCR 検査、血培塗抹、心電図など多岐にわたるが、検体検査、輸血が中心で生理機能検査科に配属された新人は日当直業務に対する不安も大きかった。そのため、2020 年度より新人研修の方法を変更した。その取り組みを報告する。

【背景】2019 年度までは入職時に配属先が決定し生理機能検査科所属になると、入職後 6 ヶ月目から日当直研修を開始し半年の研修後 1 人で日当直業務にあたっていた。しかし、当直に入る回数は 1 人あたり 1.5 回/月で頻度が少ない検査は手技や結果返却に自信が持てなかった。

【取り組み】新卒で入職したら最初の 1 年間は検体検査科に所属とし、検体検査科のルーチン業務（生化学、血液凝固、尿一般、輸血、検査受付）と心電図がひととおり出来るようになってから、配属先を決定する方法に変更した。

プリセプター制度も導入し研修中は業務や精神面のフォローも行うようにした。

【結果】2022 年度までに 4 名の新入職員がこの方法で研修した。日当直に入るまでに約 250 のチェック項目をクリアしなければならないので、適切な検査と正しい結果解釈に自信を持ってできるようになった。専門性の高い輸血教育も時間をかけてできるようになり緊急輸血などにも適切に対応できている。また、精度管理の知識や機器のメンテナンスを習得しているため機器トラブルによるアクシデントにも強くなった。検体検査科の研修は充実し、研修チェック表やマニュアルが改定され使いやすくなった。

【考察・まとめ】緊急対応が必要な場面もある日当直業務の不安はゼロになることはないと思うが、知識と経験で対処できることが多い。今回の取り組みは新人技師の不安軽減と検査室全体の力量アップに繋がった。今後、日当直に従事している全ての技師が質の高い検査を維持できるような研修制度を構築したい。

連絡先 092-651-9890